



杖乘拾葉集

改正

二ツ八のついで

伊地知文庫
文庫20
361
6



文庫20
361
6

伊地知氏書冊

技業拾葉集卷第二十八

目錄

海道記

作者可考

能勢文庫

扶桑拾葉集卷二十八

海乃記

作者可考

白河乃濱中山の麓、田素函極老使古あり
 性器の底なるもれを能を死らひ藝をいり
 よふいしとくくは乃運ハ本より落せしと報紙
 もら命をくりくもつらみをくさぬる一可
 一は、盆泉を帷幕と成く身を落よせ
 多力なりねをのこたさむかしく窮谷乃
 垣本とくくま樹よ花をくさる惜くぬ命れ
 さらすくく惜らるれを投牙乃淵を胸のどくは溪



一存とらうしふきつをるまうわい存したれ
を新腸と称と愁中と茂る去と厥を折と
源の飢をさあふ伯夷の賢とあしつれ人をも
とつめは秋と菓を捨る貧き病をりやと養
子の菓をいまこ飢きうは活ひとす九夏三伏
乃汗を拭くころも一汗の中一塵あは涼を
振くといややと一玄冬素雪と嵐の凌と阿
比とらひ方のうらよ衣るまををせくま
むくる一忘乃曇も集るれと目うらの暗りも一か
にを尺とくおらうとや一たも人持乃酒を
敵事なつこれと心よ常と醒くきりつと夢を

忘れんや然る歳水もやく流る生涯とくつれ
なんとするすれとも為るに又旬乃齡の流車
坂と下る朝馳普陀す日月廻り後約いま後
乃新と対居るととぬ霧と恥娘子成死て白
縁とあられも曇りよりあ影乃うらよハ齡を
孩とす老とつと露の貫のわたりよ子落を
いとふ花鶴とおとらき表をとりよ心と一息
僧と僧をまひゆとゆとら念漸とおら石
利と才と弄淨柳林と花ちりふを光樹の葉
と熟とらを初とく一薜蘿を肩とまら法
衣乃又とみらと衣のうらと珠と帰るるを

けし一且番乃露の才と山の毛乃草畑、まこ
とまわとも物産と布と絶く天を仰むむか
一世と黙居と貧道より、とふれとも仙を念
とら思とま(点)とむこまら、や聖れ吾方を契
りし一聖於頭池乃道より、まらりまこ(点)と
をのわ、者為をいむいむこ(点)と(点)と(点)と座
禅の宮より、とら一然而曹勝、酒も人を点
ハしてより、か一子宰踏をい、踏く才乃柴
とも、鵝眼たも、何と天命於海、杖つとて、安
をさしとく、摩才ハ、まき、何と、地忍の水、は
と、起く湯、故う、何れ空後、一玉、まら、ゆ、成

す、(点)と餘味あり、薄紙百綴乃、於、まら、く、服、身
袴を肌、故あり、とむら、まら、何と、槍、笠を、く、小
り、と、装、と、以、出家、ま、才、な、り、と、く、い、を、あ、ん
ま、む、と、す、遁、世、乃、道、也、抑、相、様、因、德、倉、郡、ハ
下界の鹿沼苑天朝の築場別なり、氏弱の
林を、た、以、万、葉、ま、花、す、よ、い、く、ま、勇、士、道、り
さ、く、ま、り、百、歩、北、柳、百、歩、い、中、り、ら、ハ、曉、月、ハ
佩、く、り、一、張、う、ま、ま、ら、胸、を、い、を、一、劔、ハ、秋
ま、お、お、乃、と、一、云、尺、き、れ、と、腰、す、一、勝、岡、乃
一陣、ハ、風、を、楯、よ、一、て、あ、く、を、推、伏、一、猛
豪、手、ふ、と、く、く、と、く、並、く、雄、姿、は、于、武、威、を、い

や江洲よの夜をのろめと心真つよのくし野庭
るをいこちとくもの散をふりし洲は新やふ
郊をたてし橋ぬ前逢林函たも縁よまき暮
よらゆ後後山ささりて白雲路をうつし既
よ斜陽系くわくも晴ぬ志きつりよまきふくろ
神を志わつてく娘ふ橋乃あまれを志りぬ
そり山館よ即ち霧よりおく晴のちを暮ぬぬ
り煙高早子巖乃路をうけく水よをくして又
水よをむ波の深長堤をうけくすむ濱若
の橋乃橋下よ八柱奉をむくくろくろく
乃へ清く人園をむけたりよ八あめ名残をと

と火あきをくくふ屋古乃言根よきつりをのせ
めを腕雷岩して雲をりむむしいらぬ山は
よはくはねむく昔れ宿愛りて風の音か
るうす木このつらむりとも小翠性をこきして若
乃苦をいこく飛く乃泊よととまうことよこ
まらくをむむしひくまき人のぬりうをたけ
新くとてきて行くあつて山水點塘の真さ
観をまへ歴くとてあまの歴くまき海村林
邑乃威いやめつてつらり世道若四道乃乃よ逸
具のまきしきまらけつ子又孤牙つ斗較まは旅
さしめた道も過孤しう旧岩粒たのめ故号宗

霧路の婦人 八所燈を色紙に写し
身をもつる女一色乃とて 城邊の亭犬形と紙
をふゆしつゝ せらふとて 女形の字とぬすい
きし ちもりしつゝ しのうちもりぬくのち
しよ ちよ ちよ

きし ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ

田中赤色民宅おるに ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
ら 田中 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
ふとちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
早女ちよちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ

ハ行ろし揚々 凡そちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
山内を思ひし ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
例は ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ

ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ

若招と云可也 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
乃 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
とも ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ

東家大岳といふ河、とまらふ平流うらりな
くぬむさうはおひのさうく整をさうアを待た
いっしううさういねさうも氣とく彼處山乃多店
乃取ると信あふ事を樂天乃詩は感しけ大岳
志果乃宿のあふ何事を多美道の音よとら
そとらめ乃こらもいこをを流ねい
いほい、教をいほくさういり

あの大岳をさうあさう、新を内ま白河外さ
白河といぬ野をさうあ終鹿山、いさう山より
と伊勢の國、うほさぬを山さうさう、想れ
らふまを屏風流志をく、魁樹相なう、霧

と又万留乃帷帳を流くあつ、一岸、ハ松ゆこ
く、朝、密、康、の姿、さうり、且、舞、林、ハ、葉
花、稀、一、弦、と、弓、人、志、綿、を、終、よ、ち、里、や、ハ、是
の、く、あ、さ、す、山、娘、の、友、乃、衣、を、指、の、こ、と、り
よ、う、う、う、を、樹、神、さ、あ、あ、孔、響、音、を、若、乃、ち、ま、こ、あ
ぬ、け、後、を、何、里、と、も、志、く、に、越、新、ハ、羊、腸、扱、ま、し、
い、く、い、ま、あ、馬、石、ふ、あ、い、ま、い、ま、い、ま、い、
山、ハ、一、山、乃、中、ハ、教、山、を、陽、く、子、巖、ま、ハ、岸、よ、こ、さ、
里、一、河、の、た、う、れ、百、歳、ハ、流、さ、あ、店、客、乃、歩、ハ、是、を
む、こ、せ、り、山、里、江、履、を、当、流、ハ、者、と、い、ま、い、ま、
里、乃、新、者、ハ、な、う、ち、ま、い、ま、い、ま、い、

稻穀を獲て夏のあをくらくく雷光のうね
より九穂をこもみく三秋のつる乃業
力をこもすあね乃税きれりくく創
寛刑哉志進り藩報定く業なるあは

苗代まらうつよはのあゆり那

いな葉乃くもれあき乃おまのき

甲はあまの古も悪くてまのりさぬ
る稻を見しはいつれ山は遠く水きよりか
よゆりもれる一輪の出る方入東海を日
の光よこもふとくも晚れらとまらぬれ
くま昼夜を海命の端をん事らくく一をの

つう一歩を控くあまをこもくをくらあり
あまの往還を路一つ一とあまをくも
於鄙まら中海の出るあはらうの日はあまを
事を

ぬらこを山のくもあまを

こやこ乃くもをういむらくも

秋信の市勝と云よとまらあまをえおらま
海さく入る河泊の民うらまや一まわれ
えあくわく峯崎く山祇の髪はまを川
移るをういお乃浪をさき乃大を出一
入海のういお乃浪をさき乃大を出一
秋水を大の敷
やうも
まら也
あまのくもく晴龍と孤枕の着は破るじと

お田うけ卯月よなれを友に乃
いふもたなき子よあしひらけり

函月系あしむれく旅店よ人たつものぬき
まの枕を志せく萱津の宿よとまりぬ
八日萱津城立て鳴海の浦よ来甲の勢大田
実乃此景を色にけり亦現利首の音後よひ
さまつきこし一心再拜の謙徳よ歌をうさ
皆鳥居よじつじくは字門を祝すは柱沈
乃砌しろくよ舞光の色よ文上木おれ階て凡
上松風天よ吹せりいよ靈験日新よ人
中の心花春れしよとてよのこる

林梢枝をさきく幡蓋社殿のうらよぬ
金玉乃権柄よい合色を神殿乃面よ
く彼和光同茶よ来際をさきく朝如き事
あしむ羊蟹よ来後悔よ向あのをい
後衆の末まよ向方のきりよ一柱を
りれ拜をよらして来まの良流よん海
の便結なよりり事るあれ此様感おけ付
光をさきく少るを算を守おひたり明神
と乃若し應し給くも夜のめ曉を神よ
のこあしむれしや
しつとつらなるあまの戸よわぬ

わさるるを〜再読〜 我と一時乃命なれを
後見部〜

ちよふすまぬら〜又と二村
やまぬる〜の松のた〜

山中の塚川あやしを河よ〜人て
川渡れも 新と〜洗と我と
ゆ〜り〜ふ〜い〜りぬ 雑穀
場を〜あ教里乃あ京一
乃橋を〜つを
〜ハ橋と〜りふ〜
水よ〜さ〜る 枯着を
昔も〜也〜り〜り
人橋も 回〜橋を

とも来度つ〜ら〜ん相如。世を〜
を肥馬よ新と昇徳より
〜子牙 捨る窮鳥
小橋おりふ人を昔も
〜や橋柱よけ〜
〜のれも朽ぬる。むれ〜
朽ぬるもの
又す〜

あ〜らゆ〜い〜も
お乃橋のう〜よ
何〜る〜く〜も
〜板ハ橋〜

詔を八かき極み跡に溝のあり心のうちを
のしむるねと云のうらふと成るる事

宮格乃のころころらよこもてん

朽くいく世さき日しりぬら

まふもともりをさけと昔種なををとり
ともさ乃中を味斜折能く西合よをて
日の入種よ矢矯乃宮よ落はるる

九日矢矯を立く赤板ま名をとりむり此
宮乃遊君花詠喜もまやのし
さあ女あしりり魚を清安仁り
妹よりり梨を三列史の書妻よ結り妻

と良人よ先く世はあし良人を妻よをくは
家といつてす利をさ善薄の化現してまを
道すり又とく次通大師の意心し多妻を
ま〜つる。よん吾知裁大なり因縁なりこの
旧室如。吹雪よ折舞悪然りり吾教の徳を
る一異域朝朔乃物仙よ鼻酸拍折忽る智行
乃徳よと小臣唐よ名をあきく不舒光を
る上人誠よ貴難いころ初意心乃道し入聖
るよと別本牙佛の世し出る人を伴
るよあ〜るや初昔を誇して終ると何
〜〜

いよーとららみちばらさしよー
いよおしりたさしなりそ

わくまが野の原を色れも嫩るやー 蕨をさるの
心を生けりやー 秋乃色うとをわさし分好弱
ハ鹿毛もゆる白時ー 田言いよくれ月星
醜は形れ時をー やめて豊河乃宿よとま
ぬ涼衣よ立出てー せれせ川ハたうれ廣くあ
ふくーーしてさしよーゆらなる波なり河を石
漸く流る浪の音を月乃光よこさきり川邊
よさる凡乃響ハ表の色白ー 又さ此ハひか
のさみりよと月よりわくー なるめなまきたる

わんまー

さる人もなまささる浪のよらのさ
ふまーー 月乃をささー

十のさし河をささる 踏くれ里をさしよーや
るさしをささるやー 原をささるあさ白野のまの
さしよりせさるさ本乃枝ののむさくささる
松月よさしさる山も色たさしよー 深
をさるの感心悟しよー

山乃さるのささるささるのささる
野乃さるのささるささるのさ
やさる志山よささるさ利を踏くれ大歌

昔海南の海に遊舟をこぼゆくおねに
のそ辞詠ひしは通るる舟を濱名の松
よこしく時よ日車あよ馳ふ半漢漸あ
る秋月輪峯よあくりく兔京はめて出
たり浦吹松尾を脚毛なるとぬ膝をひま
しに巖をあらぬ浪を音とやもたよまじや
を昔年よま川初文を君ひこり乃昔り
りうたあ七編の志をむしりあま夏足るやの
とも深編をこよしのともりあははは
し目さうて敷ぬを松乃さうしきさう磯を
と海よさう浪を水口つまひしとくの志

れども晴くもりの月を垂るうとを初を
うらうらと志のひやうすく彼釣真乃火の
つまをるこれ座へ入る魚おきしをさう
お舟も棹のうらうらとくのうらうらと
まは客のねさうらうらとあおおも既よゆ
きを星乃しりりまわらぬ宿立人の神を
みし餘一かなる舟よあはれあはれぬあう
ちつれあ出まるとく四橋よまもまりてあ
つしきしりりり奥をわ橋のりよさう乃
ほらうあおまこくぬ水をくしよさうあ
なれ松をさうぬ風をあはわらをさ

乃曲より必か 濱游珠を法く 八則五く巖の
るまよくこけ 優たよりる 又魏たよりこれ
志福く思ひか 命あくも 単の再し珠
このころりせらん

たしきまは松ふハウセのくま
きちらまわやふいさくもん

枝乃ゆよま 廻澤のやまをす
くく見よ 一丁新を岳ま色よハりありあ
那原よハ沢あま 岩よま 河よま 枝とく
さしてまよ 水よりけりけをこく
このころりま 文よ お遠せり水と 本とハ相

生中より さいきまのうけを向
いふくゆ時既 ぬくれよ 木の宿
向く池田乃宿 とも
十二百池田をま 新く林ま
またなれ 天中川をま 水
く波さく 又面三町をま 水
松をもちま 水を 起てし
王霸の建よあ 浮沱河 出むす
河くは 張将 牛漢 浪よ 浮

源谷一峯なり此みちをけりてはつらふにけりあ
谷ま楨を賜りてみち群鳥乃啼を是のまな
中谷乃多片をふくく又山のあひつ成とくは
中山と名くくり山をむく乃山九折のみち
さうとて一に心をあはせたり楨を條乃尺より
さふよこけしとてちをさふとてまはけり
うらなはれ一付のほろろ百殺まきまり
ちるあゆみとて秦蓋乃ぬのをとてあま
して舟なあひ高経も風のひくまを
あせしとて舟よこし

このほろろさう乃中山たのめ

さうなまらうらうら

けり胡馬をつれと日鳥翅さうりぬれ
茶命とやうなむじとてあま川乃たゆ
とてりぬ或家のまらら故中出門中納家
けつとて書付しとて彼南陽縣の菊水と家
を汲く齡をのた乃東海道も菊河^岸河
やせりとて合紙合くせんとてとてあま
とてうお同遊とて牙を累葉乃骨枝とてま
まそを友を黄門のまら階のちるまは
乃月まらまら冠れとてをまら一仙洞のま
るのちるも綿乃袖とて色をあはせとて

業ふよあつわつ時くさると句いーくも今れ
をささーとらまはとさいつひをさもなひま
えかふるまふあつむとさ思ひやまらる(ま)さあえ
あさまーや去承久三年中甸天下風あまて海
田のるまささりつりさ闘乱乃乱紛を花城よりた
れ合戦乃戦ちを夷國より戦暴雷雲を雲ーとく
日月光をさおほしれ軍意北をーこーーとら劔
威をふるあまあひく業威まらふ乃く急風もれ
く枝残あささー一語ま何色波あやまらるまら
をさそ茨山流水乃源流ささりくふれささるふ
西海のささささり郷相羽林花族のささる

高東園も東よとらあぬあわさるこさあさるお離
ま乃月のいりりあささささささささささささ
強のろさささささささささささささささささ
ささささささささささささささささささささ
ゆめささささささささささささささささささ
乃床まさささささ武容の宿とさささささささ
川まささささささささささささささささささ
ささささささささささささささささささささ
蒼とささささささささささささささささささ
ささささささささささささささささささささ
思まささささささささささささささささささ

ちかきるまにいふあはれいしに甲斐の白雲といふは
まじしとて命はれはる又つをよとてこのあはれ
較り乃らるるさしとてやふのいふ百とせは
そのつらつらとぬらふとて下界のさしとて
よはれとて物をや

おしとて命のあはれとてさしとてあはれと
まじしとて命のあはれとてさしとてあはれと

中夜のいふまをさしとてぬらぬの音風のさし
よころもさしとてぬらぬの音風のさし
寺ありとてぬらぬの音風のさし
いり堂園無昌とてぬらぬの音風のさし

り一糸後誦乃とてぬらぬの音風のさし
安居一夏の紗八様花汲水のほとめ誦をあはれ
ぬ誦すらとてぬらぬの音風のさし
よとて利すらとてぬらぬの音風のさし
迎のさしとてぬらぬの音風のさし
堂薩乃建立とてぬらぬの音風のさし
まじしとて命のあはれとてさしとてあはれと
月あはれとて命のあはれとてさしとてあはれと
百箇歳とて命のあはれとてさしとてあはれと
百餘中乃禱房とてぬらぬの音風のさし
山脈とてぬらぬの音風のさし

浮夫乃波をまきを行く多月のこもる夜あ
らう紀洗陰の磯を響をたると風乃使脚あ
しきくももくすく若をほきらあうま
も真をえす年、耽る可うあすも圓を
少きすす取目乃感もこつなうほるたこた
らうあは浪よあひいぬまく風いんら
とくも松乃むるくくくく若松もく
をゆきく樟花愛して石あは圓金の邊
よ布きくくくくくあはむくくく記り乃
布をとらうくくはもくくく石平なるた
やうく

うきくせよ法入くくくくく貝
ひらふたうり乃たうくくくわ
くくくわくくくくくくくくくく
おほくくく神くくくくくくく
海老をなうくくくくおは紀島老をけりきく
よりくくくく胸くくくく海を志くくく生涯う
る命をいくくく我ハ志くく知中乃一瞬を身
くくくおまら乃浦をまくれくくくくくゆのみ
少くくくくく人の神うちくくくくくくく
くくく魚をくくくくくくくくくくく松
くくくくくくくくくくくくくくくくく

まらひぬち乃松原るく風を
しつちんれをわらふ

藤原を常よりわらふこりたてり
十四日藤原をきくけりし行を
すしきまの貴い馬より後河よりぬ
後福よりしるすのれは世より
こゝろをさるるやる後新孫乃
なりし志しれくうらすく福を
里を何ゆえんをたうけ
なんろぬんらんや人の心を
しきなる老るをそのこり
らるる老る

きる海をきくもこれより
あつた川のろく水のこり
らるる

きくもこれより
らるる

しつちんれをわらふこりたてり
十四日藤原をきくけりし行を
すしきまの貴い馬より後河よりぬ
後福よりしるすのれは世より
こゝろをさるるやる後新孫乃
なりし志しれくうらすく福を
里を何ゆえんをたうけ
なんろぬんらんや人の心を
しきなる老るをそのこり
らるる老る

を

其のつゝたる人ありといふせん
いと好きたるもいふるを

うのやせをくれんやこゝして暮らさるゝ
毛くよま天のくく群山を越るうね
を鳥路よりあもとの鹿道より人路あり
と絶えついでいりあもとの雪を及中よ似
り頂よ度く尖なり雲を版帯のとへ
圍りく毛く言さる天の階をてり
のりるものも還くもる毛事と松葉よりを
くくするものも山を肩より温泉いり

よ沸く細相よりく冷池脈を沸く
流河をくく水減く世をくねのく
雲山なりく毛くいりく
松沢と新遊のか比ゆん彼仙女、
と柳腰をじりく天神
築山と松の姿を今のなめく
山の頂よ
あり湯れ
いと好むいと仙女このくあやい
くく新山とく山あり延暦寺中
天神くくく
くくすくくく乃くねく天
漢の中く沖
く人のほくくゆ眼をくく
立魂悦
くくあれたく

いりくくの雪はのりてさく山

天よあるとやら付帝山しつらふいすうめは
えふ不死者くすりよ歌をつらきとて
女をさしきりて歌ゆ

今ちとふあま乃くころもさる
君をあわれとおり花つらめ

みくこれ城出候しと見すしつら
うやとて悲恋しとて身は
鷹札をつらきとすりてしつら
と返す

あつたれなとてしつら
とちとあらすつらとて

使言智計をあらとてとらつた
しとらとて留古のつら
きれは業もつと煙とむす
と不死者といつらとて那の
ちとてや彼も仙女なり
とて彼に死つらとて
とてつらとて好女とて
とてつらとてとてつら
とてつらとてつらとて

せららゆめなほしるめしんもさつせくはらな
うらさゆもこつてももろま乃指をさしあ
一乃しきつをよまめ谷のトくさつてあ
こはらさくくくろくぬ露才もをさしあ
まつしきつをよまめ命を悟るくう勢
よ人のいそ業を存も狀才ハとてあくや
よらうこくあられな終け乃心をいらあ
細言浮遊。系をさるものをもくくけの
るものさくしりりりくを梅察使乃倍僕君
を遺骨を捨ち終よくとなくくいひ
るわをさるくも終うく事なれを魂とい

ふりさこくうはきくくまわくう道まー記
知るくをのつて虎口よと出く鬼毛の命も
やうもなれまきくせんくうくくハ終ま
ふしきためくもさくくさくくあー我も
あに馬のちまうせくく一乃宿は終ま
こよひまうりま終まのト乃すくく
らもよらまゆか書とあま
もせんくうあれを乃一乃のうくく
まき信もあくく
いんれあ命もをさしあ
うらさゆもこつてももろま乃指をさしあ

たふり本形川をまぎく遇河と云路原をすく
此路は乃こそとて志はたかきことゆきし細六ハ
こゝろをくやくあつとてはえげつと心中に
治あり今志はしつとてしつとてはたかき
らうらうとるはせんてとてはたかき
たれなる人き改や馬鬼の女らとてとて半頭乃
こゝろをくくんとすは乃鹿もたかきもいをく
人かやとてかたてあつとてやのよた紫あ
もも今一夜まきつとてはたかきとてはたかき
くはれとてあつとてはたかきとてはたかき
もたかきてけ原とてたつとてはたかきとてはたかき

道のよきとらうくわよらり

こやこををらうくわよらり
あつとて乃何とて乃本葉とてはたかき

やとて探察使た云法持おれとてのよとて
てとての露もしとて志はくとてをらとてはたかき
きの主人はねとてはたかきとてはたかき
と世乃らうとての事の理也とてはたかきとてはたかき
せとて理をのくとて志はくとてはたかきとてはたかき
はらとてはたかきとてはたかきとてはたかき
あつとてはたかきとてはたかきとてはたかき
ひのこち波とて人討とてはたかきとてはたかき

わくみ一情一なる秋乃天も々のを誠の時乃
冥孽乃遇よあへりといふもこゝろこれ支世の
常業もむくゆ剛也柝の人の官班力を
若るれまはれ何く君恩にゆくまてこゝろか
治る乃一人中一ひもまよさるるか
る也よ何れ中一黄の如護と敵を貫首と
して一匹の弓一捷を抜一ひもさ豹の守居と
多万枝恋と線をとくはくま誰かありひ天俄
よ災をくして天命を知らほ地まらま
らよ天をあまきま地まをうらまんとを何
まねたうか入木のともれ終るとせり託念

一のこり陽象も霊魂と九和乃ゆめまよひ
み地こまも告悪心よつうして生死公
眼るまとおうりまは井の十念相續一多化
界うういアぬ友の終輝のう一人醉世ま
アも向乃妄念ハまをあま何れ南ま西方
浮随飲吾くれと地乃善心なまこりあはれ
未運き姑に何アままこの人乃別世一
邊とくちるあままこくハ淡茅あまこせ
ちこめたましく常業も霧のるれ世常の口
りるるを樹なりまを別りま為まこい
おりまもうらまけり世中か官位とま乃ま

ふこころをよめくせ念をきくくして魂ひを去
よきし 倅終る義を論せし 智をもりあへし 妙方
にハ中と成定て九品乃寶蓮の 丹らひくく人 彼明
化をえく 天 野よ ありひくく 八度をもむく ち家
の乃ららるしと うちらるし 鹿貴を 兼て 仙明よ
く 累葉乃 花 芳枝の 風く 従ひて 傷 小 平日
のく 成 思く して 末 西 天 たる せきく して かく ころ
寺 堂乃 鹿 なる しく ちらる 小 荒乃 地く ころ じと
を 花の 床を かり ぶく ちら せん 詠く して ありて 可
る 一 親 族を ちか 一 欠とも けく 一 族く せく
いと 心く 一 ぬ 楊 固 忠の 化 畧く ちら けく ちら

す人乃 ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく
ひらひし 一 おりい や ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく
く ちく ちん ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく
上乃 月 ぬく ちく ちく 誠く ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく
ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく

ねのひさや 故を 垂す ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく
を 山 路へ 一 流 ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく

夫人 ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく
うく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく
ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく
ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく ちく

るくつし初と上分をまゝ法師ハまひぬを
まげしる乃あつるをまづつあつるむけ色れ山
ちく禰傍五て法華經を讀誦して教を傳
目をくらすま時女志形おあつる教して強ゆ
てあくれと忽死してうせぬまむ徳力を志
らに傍の禰をあや一子あ糸を播くしうり
裾よつまよるうへくああ糸をまゝ
これく海よまひし道まやう井山よいさきりぬ炭穴
入く龍尾へ行をうりりり神龍形飛して後
傍くしうりまやういを入とといつて支檀現ハ利
生乃するふなり化現せま何とすうりうり

くん仏經に讀誦の傍なり神をまゝ何う傍
をまゝしんやまうさちういしうりうり見てう波
よあつるおとと密解と天よ知進まうりまゝい
くこまきうねも神意と人志うりまゝい
うもまきういしあやあうりまゝい
江乃志まやさうり増強よいあや
神とらうりい乃もうりうりたるあや

禰志池よ高紀山あつる山のうねうりうりま
うらうらといつとと怪石うりいあつる真ふま
よあつるに歩をうりうり石をうりうりむ
か乃堀うりうりまうり盤もむなりうりうりも久

あゝ多きをくち龍蹄を奉命の市の味ゆ
福とけいなり春日より出ぬれを光せりく
照る萬人の分贖は去風をともく威権を
誠を四方をともくやふらるる況や旧水涼
をこころより清流のまじりて
新花の果敷よりしるす多紫友をくく万歳を
しるす凡座制を惟怯を甲一廻く徳南
を乃るるはけりちりてのこころの家を
扁をさすれく秋乃きををしりて人偏ハ
心を細くわらうとしかこころに魚政のむらり
まじり

秋乃きものこころ家の一くく

らりぬ日乃こころりりて

此像過く付くりりく歴然すれも東南の角
一たはみ様のほ高貴の高人百族よまをい東
西ゆらこ方と高早乃山風のこころま廻り
一ををくこころ南ま山に麓より行て大御堂新所
堂を好むれも仏像鳥窓のこころ瑛瑛眼よ
わやま月殿昼梁のこころかたハ金泥色を向
らるる次よ花しり乃すくは隙と二階堂其
礼よととと餘堂も踣蹠して感歎をよした
一第一第二の重櫓よハ玉れりて鶯も翅を

アミミをうらむに—あれ不信のきよにお
はして感應も日就きこころり—これる去
乃福因をうらむに—現在乃多果をほきり
くせ報よとくくハ佛のらひいこのむやいあや
お言教よとくく辱も我をたんろむな—さ
信否とも—感—て—妄恨—り—よ—お—う—天
眼あひた—り—て—氣—を—無—給—思—母—乃—目—赤
—中—壞—を—謝——多—白—髮—を—相——思—る—の—方
の—う—ら—ハ—か—を—と—け—も—思—衣—を—き—る—事—を
美—の—ら—ち—争—か—ぬ—い—一旦—乃—雪—く—も—と—ち—り—
な—や—も—美—強—乃—進—も—く—あ—も—九—思—の—病—い—

きをく—ん子—若—ハ—子—若—う—ろ—あ——は—く—も—風
樹—凡—の—根—の—こ—す—事—な—う—れ

い—よ—せん—む—す—ふ—こ—乃—牙—を—こ—し—給—り—
秋—く—も—く—も—お—は—く—や—よ—り—せ

東—國—と—これ—佛—法—の—初—乃—た—れ—も—教—心—乃—沙—汰
—も—も—修—り—す—く—こ—方—る—り—こ—の—故—く—本—方
初—教—乃—因—地—より—落——て—金—刺—極—妙—乃—果—門—を
開—ん—と—お—り——て—欲—ま—さ—う——ハ——と—流—流—を—道
新—く—も—白—砂—た—ら—ぬ—お—と——る—く—も—ゆ—ま——て
極—樂—金—繩—の—う—ら—く—も—お—ま—ひ—や—も—極—く——き—れ
根—樹—七—音—凡—風—吾—苦—の—こ—ん—を—と—く——業—道—の—業

の色は深功深乃化は水が悩まぬあつを阿の
善根をたやと樹業提のこ乃を成むすぬ
たわさる文殿とす方と能多居さうとむく
こよ利生を約法とす人さるは説法集舎
ま場とまうとて空をれ命を延命一末
るじつと見佛は法乃室と誇る未退乃
樂と世舎す久を世と老父母と孫中元のみ
あふ歌れると云生との妻のハからうとて新
来業障とむすひきり法教禪依の味と口を
うらふ子ら揚殿殊妙とくさるを牙持うと日
とたるとれちをさるとこ十一念乃月胸ととれ

才一義定乃水心ととせたり此の如くは無始の来
竹うりらゆめたうくさめ六趣悔の冥ハ盲眼
ひもをさる彼無常念乃右心を思ふ契り
深波の何はく法苑因信と旧信を断じて
あらうと我おとあうと世に依る九思是乃
吾政をさる一念をこれ嘗るこひと平字引
接乃貴とあつとて法天降降の念議をか
す六賊を罪乃犯却る皆定と吾漏のちを巻
七宝れさるは八中八教とて五知思惟のひ
つらえからる念仏乃ものをもとて二脇片
度くハ二十二字大照弘誓れあつをさる

苦海乃沈没をすくふ故く三世乃此の海度
りしを又道の罪人も然海不捨をあり梅さ
ふ彼者くくく十方去乃淨刹よせてくれ
此界も悉後も大雄起世も翅よりくち西天
に飛んあしれく生後多みらよ今や
なすれもこの理れありて
んるんるんるんるんるんるんるんるん
まよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ
なすれくくくくくくくくくくく
東國よとてくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あしれくくくくくくくくくくくくくくくく
仏と之字乃名号をとりよめくくくくくく
性もくくくくくくくくくくくくくくくく
初も契りも十地證王位はくくくくくく
ものくくく他力をあてくくくくくく
福もくくくくくくくくくくくくくくくく
よき者孰れくくくくくくくくくくくく
蝇乃千里よ翔くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
世後乃演難くくくくくくくくくくく
す妻子をわくくくくくくくくくくく

飛うりをへてさうりまの棹の鹿を羅業の山
かかれく驅どもいづこいづこがほま鹿一切の
くちを別く遊もくちの睡眠の国を
あつちを乃くまを考うらぶらうちを諸の
せきれ昔をさす遊戯の床の善の思に
おやうらむくも分限有為乃くちをさ
まに老サ不定乃相と眼よさすいづち
凡てくちをさす心やうちをさす先
後相遠のくちを平よみらふ風のこと
ひきもまをさすれくちをさすさ
と老を待くちをさす録命をおく尺くちを

若きれも実くゆきを初もさる山水鮮り
ふくちをさす志きうりよ泉よら風煙命滅や
忽く冥途よまをひ又斯拈杖とおくちを
まをさす養后停僕と哭丁れも路を
り天使よまをさす地獄よ路をさす冥路山
さく嬰兒のあゆまをさすいづちを
泉よまをさす單己の目くちをさす
丁かきく獄卒を所考くちを
後悔魂をくちをさす此罪よちのまを
此ま舌をくちをさす惡徳くちをさす鏡の中
凡新自業のむくちをさす礼よちを嗚呼

へうし我もあしすら我回しを悟るるは
後諦しち里ももしるも鶯駉乃咫尺は
こころし一れゆく福をいり可きも
もつ雲くまらなをうらやこまや小鳥のまうた
あふふらりる里世宗家を出し始道入
一時才れあはれし僧さつれし人の教を
里は後五懐の昔あしこころを託し他真を
そらふこれをしすあまら人あはれ
人照通も二縁も又一佛も一
高きをしすくまんと也

ひくく(まじむ)福のちちすはこひは

表まつちか乃えつるよこの福
かこしつかもるもすむも法の水
ひくくなれやくこまらり



